會報

昭和十五年一月　91　日本山岳會

瑞西ヒマラヤ遠征隊の行動

（ガルワール）

吉澤一郎

瑞西隊のガルワール遠征計畫に關しては既に會報第八十七號に於て詳述してある。まだ悉しい結末は瞭りわかつてゐないが、十月末にはもう一行はチューリヒに歸つてゐる筈なので、此の邊で彼等の行動を一應纒めて置きたいと思ふ。

參考文獻は「ディ・アルペン」八月九月十月號、會員會原氏寄贈のステイツマン（カルカツタの新聞）、山岳、會報其の他である。いづれ詳細はアルパイン・ジャーナルか、ヒマラヤン・ジャーナルに出る事と思ふから研究して置いた此の方面の先驅者等の業績と一緒にして「山岳」の方へでも發表する積りである。

× × ×

最初に重複するとは思ふが瑞西隊のメンバーを今一度揭げて置く。

（隊長）アンドレ・ロッシュ

フリッツ・シュユトイリィ

ダヴィッド・ツォグ

（測量係）エルンスト・フーバー

五月九日　チューリヒ出發

五月二十二日　孟買上陸、シュトイリィはダージリンへ向ひ、ロッシュ及びフーバーはデラ・ダンへ。ツォグはラニケットへ出發。

六月三日　一行全員ラニケット出發。苦力四十二名、サーダー一名、シェルパ六名、計五十三名。他にヒマラヤンクラブからの連絡係一名。

六月十三日　ラタ部落着

六月十五日　ヅラシ峠發

六月十九日　ラマニ氷河着

B・C　約五、〇〇〇米

I・C　約六、〇〇〇米

六月二十二日　吹雪の爲め攻擊中止。

六月二十四日　ロッシュ、ツォグ、シュトイリィの三人午前三時登攀開始。天候激變の爲め山頂下三百米にして賢明なる退却を爲す。午後八時中間キャンプ歸着、疲勞困憊。

數日休養、新計畫樹立、「肩」に前進キャンプ設置の事となる。バットレスにザイル固定、登攀に便す。フーバーは測量準備の爲めラタへ下山

七月三日　ラマニ氷河地域天候恢復し來る。

七月四日　前進キャンプに移る。

七月五日　午前六時幕營地發、十時引返點着、十一時山頂ピラミッドの基部に立ち、正午三人は遂にドゥナギリの山巔を足下にす。下降、二時間半にて前進キャンプ着、その儘B・Cに下れり。

此處でドゥナギリに關係ある先驅者の事績を簡單に述べて置かう。

（一八八三年） グレハム等の遠征があるが之はオリヴァーの考證によればニティ峠をドゥナギリと感違ひしてゐるらしい。

（一九〇七年） ロングスタッフとブルース初めてバギニ峠を踰えラマニ氷河に最初の足跡を印した。然しド峰の登攀は考へてゐなかつた樣である。

（一九二〇年） ケラスはエヴェレスト遠征への準備の爲め「酸素研究委員會」其他の援助の許にガルワールに入りカメット方面の遠征の歸途十月五日ドゥナギリイの部落に至りド峰の登山を計畫したが苦力の無能の爲め目的を果さなかつた。

（一九三三年） オリヴァーとキャンベルの二人は西面バットレスから南西稜に出ようとしたがその不可能を見極めて退却。

（一九三六年） シプトンは初めて東面より南西稜に達し、バットレスの下に天幕を張つて肩まで登攀したが時間の不足で引返す。

（一九三七年） マナ峰の登頂に成功したスマイスはナンダ・デヴイの東峰攻擊を放棄してド峰に轉ずる事になつた。前出オリヴァーも同行してゐた。胸壁下の天幕から往復しようとしたが惡條件に阻まれて六、七〇〇米の地點より退却してしまつたオリヴァーにとつては二度目の苦盃である。

ド峰の登攀史には之だけの過去があつたのである。之だけの事情がわかつて居れば登路の偵察も何もない登らうと思へば眞直歐洲から南西稜の鞍部まで來てしまへばいゝのである。問題はその後の天候と隊員の技倆にかゝつてゐるだけで、ロッシュ等の成功も以上の先驅者達の苦い體驗の賜物と云はなければならないであらう。

× × ×

ロッシュ等がド峰の攻擊に從事してゐた間に、フーバーはコサ氷河の方へ向つてゐた。そして寫眞測量の爲めの基線の設定や測點の決定、根據地の建設等を終へ、最後にラタバン氷河に、登攀のためのB・Cを移した。

七月二十七日、五、五〇〇米の地點に中間キャンプ設置。二十八日ポーターと共にラタバン峰（六、一二六米）に登らうとしたが擔夫の無能のため途中から引返した。

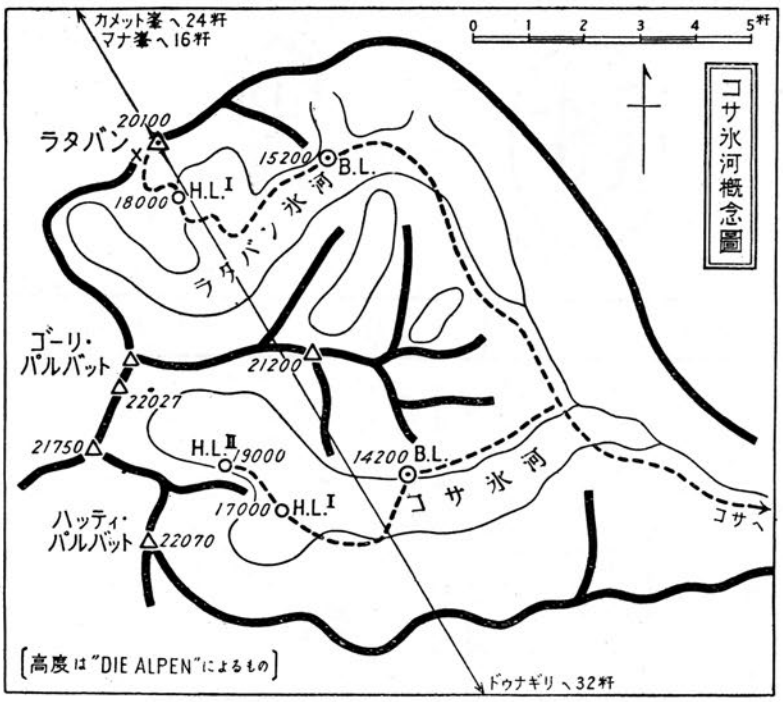
目次

・瑞西ヒマラヤ遠征隊の行動……吉澤一郎…一
・熊の爪跡（續）廣瀨潔…二
・鳥甲山……長尾宏也…三
・日光の山小屋……學習院山岳部…三
・白馬岳主稜…谷博…四
・スキーの樂しみを草に求める……石田嘉郎…五
・尺岳山の家燒失に就て……藤崎生…五
・冬のゼム氷河附近二……望月達夫譯…六
・故赤羽君を憶ふ……茨木猪之吉…八
◇會員通信　吉澤・岩永・石塚……九
◇會務報告

八月三日、ハッティ・パルバット（六、七二六米）の懸崖下にあるB・Cで同僚と再會する。此處で一行はハッティの登攀を計畫したが殆ど不可能なのを知つた。フーバーはロッシュの命により人夫三名を伴ひ再びラタバン方面の測量に向ふ。人夫の内の一名は一九三六年にエヴェレストへ行つた立派なアイス・ゲンガーである。

八月七日、頭痛のため下降した人夫一名を除きフーバーと他の二人はホーホ・ラーガーを六時半に出發、今度はメンバーが具つてゐたので午後二時遂にラタバンの頂上に達する事が出來た。之で瑞西隊にとつては二つ目の初登攀を完成した譯になる。

尙八月下旬の電報によればゴーリ・パルバット（六、七一五米）も登頂された模樣であるが、之は後報を見た上で御報告する。



熊の爪跡（續）

廣瀨潔

尾瀨から歸つて暫くすると、武田久吉氏から寫眞同封の手紙が來た。

『御敎示を得て撮影致候熊の足跡、燒いて見ても一向判明致さず、心細き極みに候、若し御手元のスケッチにて、どの邊りが搔きむしられた痕か御わかりに候はゞ、燒附の淡き方にインクにてなりと、御印し被下云々』

成程林相、樹皮、幹枝など鮮に出た寫眞ではあるが、現場ではあれほどはつきりしてゐた熊の爪跡が一向わからない。植物學の權威も、動物生態資料寫眞は畑違ひと見える。

『これでは冠さんののみしか寫眞も笑へない』と微苦笑しながら、スケッチの複製を作り、持參旁々、少し伺ひたいことがあつたので、武田氏の私宅を訪問することにした。

……

富士見町のお宅は始めてなので、濠端の交番で尋ねる。

『…丁目……番地の武田久吉さんのお宅は？』

『……』

『植物學者で、理學博士の武田久吉さんのお宅は？』

『あの方は理學博士ですか』

巡査は怪訝な顏をして、あべこべに私に聞きたゞすのだ。

『この附近に理學博士でない武田久吉と云ふ人が別に居るのかしら』

私はふとそんなことも考へてみた。實は尾瀨から歸京すると間もなく、日比谷松本樓へ行つたら、『武田久吉』と云ふ支配人が出て來て應對するので、面喰つたばかりなのだ。いさゝか神經過敏になつてゐる。

……

一體私はあはて者で、同姓同名には前から何度も失策を重ねてゐる。この夏、尾瀨ケ原の『濕原を行く』と云ふ小型映畫を撮つた酒井菊雄氏に用事があつたので、紳士錄で調べ、その勤先東京市保健局へ電話を掛けると、電話口へ出て來た酒井菊雄氏が

『私は小型映畫はやりません』

と云ふ。後で塚本園治氏に聞いたら

『小型映畫の酒井菊雄氏は野歩路會の登山家で、醫學博士の酒井菊雄氏とは同姓同名の別人だ』

と敎へられた。

又最近登山雜誌に隨筆や紀行文を書く廣瀨靜子といふ山旅倶樂部の女流登山家は、私の家内と同姓同名なので、

『あなたの奥さんですか』

と、よく人から聞かれるが、偶然にもある登山家の集會で本人に會つたら、體格容貌まで私の家内とそつくりなので驚いた。實物を見ても亭主の私が間違へさうになるのだから、他人が間違へるのも無理はない。たゞ家内より少し若くて美しいだけだ。

そゝつかしい私は、昔小島久太氏と小島烏水氏とを別人だと思つてゐたこともある。尤もこれは明治四十二、三年の頃で、まだ中學初年級の時だつたから、許して頂けるとしても、日本山岳會へ入會してからも、暫く松方義三郎氏と松方三郎氏とを別人だと思つてゐた。また民俗學の高橋文太郎氏と單獨行の加藤文太郎とをごつちやにしたり、スキー家小島三郎氏と登山家小島六郎氏と間違へたり、登山家槇有恒氏と鹽水港製糖の槇有恒氏を別人と考へたり、スキー家深田久彌氏と小說家深田久彌氏を異人と思つたり、人の名前では幾多の苦い經驗をなめてゐる。

……

巡査に敎へられた通り坂を登り、『武田久吉』と云ふ標札を穴のあくほど確めてはいると、本物の『武田久吉』氏が現れたのでほつとした。

應接間で、尾瀨の昔話や地名の考證など談じ合つてゐるうちに、話がふと尾瀨燧裏林道の『理學博士武田久吉一一・九・一九』と云ふ落書のことに及んだ。

ところが武田氏は全然記憶がないと云ふ。

『第一、明治大正昭和を通じて、そんな年月日に燧裏林道を通つたことがない』

と、いろ〳〵日記や記錄を出して確められる。

『はゝゝゝゝ。それでは誰かの惡戲

ですかな』

『非道いね。とんだ濡衣だ』

『いや。もう一人、理學博士武田久吉と云ふ人がゐるのかも知れない』

『まさか』

本物の武田久吉氏は、場所が場所だけに意外な落書と當惑される。

……

頃を見て、例の熊の足跡をインキで書入れた寫眞に、私のスケッチを添え

『爪跡のわからない寫眞では、一寸冠さんののみしか寫眞も笑へませんね』

と、權威者に一本差上げた氣になつてゐると、スケッチを眺めた武田氏はすぐ

『君、これは水楢だよ。栃ではないよ』

と來た。

實はスケッチに『栃の樹に登つた熊の爪跡』

と、説明をつけて置いたのだ。餘ういなことをしたと思つたが、もう遅い。

『栃木縣だから、栃だと思ひまして……』

『栃木縣ぢやないよ、あそこは群馬縣だよ』

と理詰めの追撃だ。さすがに理學博士だなと思つた。

『いや、銀行で紙幣ばかりいぢつてゐますので……。植物の方は……』

と、體をかはしてみたが、劍先鋭く

『猪のついた紙幣はあるが、熊のついた紙幣はないからね』

と追ひつめられて、苦しまぎれに

『富士山のついた紙幣はあるぞ！』

これは咽喉まで出したが、餘り紙幣を亂發すると悪性インフレーションの懸念もあるから、そのまゝ腹のなかへ引込めて終つた。

……

寒くなつた。今頃熊は穴にはいつて臥てゐるだらう。爪跡だけであの騒ぎだ。寫眞だ、スケッチだ、栃だ、紙幣だと。あれでは俺の指紋がとれるやうになるのは前途遼遠だ』

なんて、うそぶきながら……。

鳥甲山

長尾宏也

この夏（昭和十四年）ビューローの用事で信越國境を歩いた時、思ひがけなく鳥甲山（二、〇三七、六）に登つて來た。鳥甲山なぞといつても一寸地形圖位ゐ見たのではわからないかとも思ふ。北信濃下高井郡堺村地籍である。その時は所謂「秋山卿」を訪ねるのが目的であつた。飯山鐵道で信越國境に出て見ると千曲川はダムの工事で人夫が澤山に入込んでゐる。森宮ノ原（信濃）で下車して見ると、こゝにも大きな急造のバラック建てで飯場が幾棟か出來てゐた。宮ノ原橋を渡るとそこはもう越後である。千曲川はこゝらあたりから信濃川となるらしい。朴木澤・百ノ木なぞ越後側の山村である。ほこりつぽい往還を辿つてゐると途中道伴れが出來た。初めは越中の藥賣りかと思つてその積りで話してゐると、どうもおかしい。自分はこれから秋山卿に入るのだと名のつて見ると、連中も秋山卿和山迄ゆくのだが途中まだ十日位はかゝるのだといふ。よく聞いてみると越後の葬女だといふことである。

あゝ葬女か、それなら道伴れとしても面白い、何處か日蔭に這入つて唱はずか、さういつて見ると、この先きに心安い家がある、さういつて、とある農家に這入つていつた。土間は廣く冷えびえとしてゐて休らふにもこの上ないところであつた。葬女たちは五人で一人が案内役であるらしい二十七八、他は十六七の若い娘である。

かういふ旅の道伴れも面白い、私は小半日を彼女等とこの農家の土間で暮しいろいろ聞くところがあつた。

秋山卿に這入つて上ノ原泊り。夜明けに起き出て見ると眞正面の山の岩肌にべつとりと雪が殘つてゐる。地圖を見ると鳥甲山である。中津川の谿をへだてゝ上ノ原から見上げる鳥甲山の岩肌は三つの廊下によつて區切られてゐる。廊下から廊下をへづるだけでも面白さうである。早い朝食をとつて谿を渡り岩肌にしがみついて見る。第一の廊下には容易にとり着いた。わづかの足がゝりしかない。第二の廊下は鹿路になつてゐる。このあたりでは引鹿の群を見るなぞといふことはない、いつも一頭で往き來してゐるといふ。

鹿路に出て見ると、直ぐ足の下に屋敷の部落が點在してゐる。二十九戸も何處にあるのだらう、雪崩をさけるために人は家の敷地を自由に選ぶことが出來ない。安居する彼等は塊つてゐる。

北の方、布岩山（一四九五M）への尾根に出て見ると、こゝは寥廓とした小天地である。天狗の休みどころといふのがある。熊笹が北になびいてしまつてゐる。西につゞく尾根は遠くカヤノ平までつゞいてゐる。

鳥甲山の三角點へは結局岩肌づたひは止して尾根どほしで辿り出たわけである。嚴根を洗ふ中津川はさくさくとして響いて來る。秋山卿上ノ原の人たちはこの山頂に時々お天狗さまが出てござるといつてゐる。ほんとうにさう信じてゐるのである。お天狗樣はまた山の神でもある。その姿を見たといふ人も幾人かある。何んな象だなんてとても口に出來るものではない。何とも云へないたゞ〳〵ひれ伏してしまひたいやうな氣持ちであるといふ。山の神に助けられたことといふ人にも會つた。彼の話によれば山に這入つたからといつても滅多に山の神に逢へるものではないが、またそんなに怖ろしいものでもないといふ。山の神の家は見えないが、あの聲音は怖ろしい聲音といふよりも通つてゆく時の跡である。樹の太い枝もなびき垂れてゐる。それが何だかおそろしいのである。

この界隈では鳥甲山に山の神が出るだけで他の山では出るといふことを聞かない。

鳥甲山はさう高い山といふのでもなく嶮峻なといふのでもないが、印象的な山らしい山である。

（一一・五）

日光の山小屋

學習院輔仁會山岳部

山男のハイマートであり、憩いの精舍である山小屋を求める氣持は波多野、岡部先輩の時代より始まる。諸先輩や、西糸屋の親父の話を聞くと、昔——ホテルも森永のキャンプストアーも無かつた頃、既に史的事實となつた常さん、庄吉の全盛時代——上高地に『學習院の小舍』があつて、進歩的な優秀な登高をし、山から下れば愉快な『暴れん坊』になる學習院の山男の根城として上高地名所だつたさうた。しかし清水屋の親父とのいざこざのため小屋は他の學校に明け渡された。一時的に五千尺の小屋を借りてゐた事はあるが、それより以來、國澤、黒田、加藤泰安、鍋島、周布の諸先輩のリーダー時代を經たが心の宿は無かつた。

山小屋を作る計畫は加藤泰安先輩の時代より積極的となる。上越上ノ原、越後守門山、燕温泉の淺平、白馬の北麓、八方尾根、奥日光、甲斐

駒岳北澤、穗高ケ原が候補地に擧げられ、色々と研究されたが今一歩の所で停頓してゐた。周布先輩の時に奥日光の各處が踏査され山小屋は光徳沼の奥に決定した。奥日光にはザイルを使ふ所は雲龍峽位のもので高度の技術を練磨するには不適である。が小屋の本來の使命『部員のハイマートであり、ビギナーの養成所』には靜かな山でも良いと思ふ。

かへつて、岩場や氷にばかり獅嚙附いてゐるより、暗い谷を遡り、藪をこぎ、變化の多い山を歩き廻り、冬の奥白根男體を對象として Poler Method の訓練をする事は、スポーツアルピニストからは退嬰的であるとの非難は受けるだらうが、將來の遠征、探險への『あるもの』を植附け、正しき意味での登山を知らせてくれると考へる。

小屋の建築は芝倉澤の虹芝寮（成蹊高校）藏王の二高ヒユツテの設計者たる理博堀越三郎氏に委囑した。青寫眞も概算書も出來た。地所も帝室林野局の配慮により手に入つた。この時、支那事變が起きた。所謂『時節柄』と云ふ學校當局者の便利な言葉で、山小屋建設運動は暗礁にのりあげた。併し、希望は棄てなかつた。昭和十三年の夏、部員全部が現地に天幕を張つて二週間に亘り地均工事をした。その冬、二十五回目の關温泉スキー全宿に九十有餘名の學生の參加者獲得に成功した。越へて本年夏、再び勞働奉仕を續行して基礎的な、學生の手で出來る仕事は凡て完成した。遂に學校も山小屋の必要を認め援助を——精神的援助を意味するに過ぎぬが——を約した。直ちに工事を日光中宮祠の赤坂組に請負はすと同時に本格的資金募集にかゝつた。諸先輩、西崎一郎部長の献身的奔走により金は徐々と集つてゐる。學生は毎日毎日、日光に行つた。十月にはコンクリート工事を完了した。棟上式が行はれた。がつちりした骨組が組まれた。屋根が葺かれる、今、十一月中旬、立派に小屋は出來上つた。小屋の丸太の一本〳〵にほつぺたをくつゝけてやりたい。僕等の小屋が出來た。逝くなられた諸先輩も喜んでくださるだらう。白樺に圍まれた立派な學習院山岳部の小屋を見せてあげたい。

場所

戰場原三本松又は逆川（さかさ）までバス。それより徒歩四十分で光徳牧場に達す。牧場の裏の小路を辿ること十五分で小屋に着く。丁度スキーで山王峠から下りきつた所。小屋の附近の白樺林の美しさは日光一である。三岳と標高一七一四米の無名のギツプエルの間に湯元への近路が拓ければ一時間足らずで湯元から小屋に來られる。後ろに山王帽子、三岳を脊してゐるが小屋の東南面は開け、男體太郎を仰ぎ見る。

小屋

設計者—堀越三郎氏、木造柿葺外部背板張り二階建、一階二九坪、二階二四坪、床下薪置場三坪。收容人員三十五名、風呂、特別室の設備あり。寢具—陸軍將校用毛布を配屬將校の斡旋により三十枚入手。水量豐富。小屋の管理は光徳牧場、湯元板屋旅館。

費用

合計壹萬圓

内譯八、三五〇圓　新築工事費

五六五圓　ストーブ給水及排水基礎工事費

八〇〇圓　寢具設備其他

二八五圓　家具費

原則として一般に解放せず。小屋使用規定は不日制定します。

（土田新一記）

白馬岳主稜

谷　博

四月卅日　同行者名取博夫君（京都府立醫大豫科二年生）

午前三時、むつくり起き上つたNは忠實しくおじやを作つてゐたが、やがて「谷さん、もうそろ〳〵起きていたゞけませんか」「ううーん、もう一時間だけ睡らせてくれ」つてんでこの寫眞機はおろかナイフも持たない二人のルムペン登山家がそれでも冷え冷えと頬をはらふ朝風に少しは張り切つて猿倉を發つたのが五時丁度。四十分後には馬尻の末端にとりついてゐたが、慥かに時間は遲かつた。五月近い太陽と、いやに暖い氣温は早くもこの尾根の斜面の雪をぐざ〳〵と溶かし始めた。斜面の上部では固く締まつた熊の足跡を辿つたものゝ、恐らく豫定通り今一時間早く出發してゐたならあれ程この邊であぶつきもしなかつたらうし多分頂上へも二時間は早く登り切つたらう。

最初の岩峯に八時十分。とりつきの約五米の痩尾根は手頃の試練だつた。T膝を内飜させては膝頭で胸にとゞかん許りの雪を崩して登る。この上の、前日に偵察した際に眺めた白いピナクル迄に小隆起三つ。上半は傾斜も相當なもので前後三個の雪割れが巨きく口を開いてゐた。恐らくこれ等の雪割れは時期を同じくすれば毎時でも出現してゐる性質のものであらうか。若い現役達に雪氷技術を教へるのがこの尾根の登攀を思ひ立つた重な動機だつたが、又それ故に大抵の所をベテランは若いNが固めてくれるステツプを只のこ〳〵と追つて行つた。

ピナクルから先の雪稜は階段狀に所々急斜面を交へた平坦部からなつてゐるが、長走澤方面からピナクルの直ぐ上に仰がれる三個の雪のドームの直下に凄く痩せた所が五十米餘り續いてゐた。薄い雪庇も交り、白馬澤側には數日前に降つた粉雪の下には柔くはあるがアイゼンのツアツケでは容易に踏み拔けない程度の氷もあつたりして聊か面喰つた形だつた。雪稜の兩側にステツプををいて胯がたつり、ピツケルのシヤフトを稜線の上にをいて平衡をとつたり、少しでも幅のある所は稜線の通りとん〳〵と走つたり、「地形の弱點を巧みに捕へて」ドームの壁もラツセルに一寸苦勞した丈で至極簡單に突破した。瞰せば果しなく沈みこむかの樣に延々たる雪稜には自分達の足跡の跡々として絶えず、四邊の空氣は飽く迄も森閑と鎭まつてゐた。N曰く「ナ、ナツ、泣けてくるなあ。」

ドームより上は暫く只重いザラメ雪を漕いがだ最後のテラス直下の三段になつた雪崖は意想外に惡かつた。最下段はとりつきで約八十度の傾斜、その上に雪割れが二個。この急崖の登りはその裾が稍廣い雪の吹き凹みとなつてゐるので、滑落しても其處で止る樣に、横を絡めば少しは樂な所も眞直ぐに登り切つた。此處ではNのルートフアインドの眼がどの程度に進んだかを試みてみたが彼の採つたルートは全く自分の意見と一致してゐたのに氣をよくする。上の雪割れは右寄りに突破、こゝにも亦Nが上層の雪の下に隱れた巨きな雪割れを巧みに發見して敢然ピツケルを揮ふ。第二段階は更に急だつた。とりつきに又一米巾の雪割れがあつた。ルートをS字狀にとり一部は左側の露岩によつた。頂壁直下のテラス着午後一時十分。

朝出發の際に多少の朝燒けをみせてゐた空は先程から一面にシラスを漲らせて間もなく天氣は惡くなり相だ。小さな暈をつけた太陽の光りに

頂壁の燦然たるフイルムクラストも時折灰白にかすみ始めて來た。「氷稜に素手でピツケルを揮ふことこそ男の中の男ださうな。」と最初からいきつてゐた二人も、こゝで手袋をつけた。

頂壁の傾斜は約五十度、一面に逆光を受けて燦然と輝く五六十米の登りは今迄の惡場に比べて最初は相當なめてかゝつたが、意外にも約十糎餘りのザラメの下に硬い硬い氷があつた。最も始末におへない狀態だ。ベテラン猛然としてピツケルを揮ふ。右足に八回、左足に六回、大きな馬穴だ。途中で略眞直ぐに走つてゐる狹い雪割れを掘り出してほつと一息ついたが、この登りに下から眺めてゐたNの計算では百廿餘りステツプを刻んだといふ。頂上着二時。

「もう一度この尾根を降りてみませんか」と逸りきつたボンチヤンをなだめるのに骨を折りつゝ大雪溪をぼそ〳〵と降りて行つた。

（一四・五・一〇）

スキーの樂しみを
草に求める

石田嘉郎

鹿兒島長崎線の分岐點鳥栖から北へ二驛目九州の都博多から四十分位で達する基山は、雪に惠まれぬ私達にとつて、樂しいスキーの味はへる唯一のゲレンデである。スキー列車が走つたり山の宿が滿員お斷りと云ふ朗かなニユースも南國山男には、何等手應へが無い、それ雪だと二月嚴寒の降雪の日、猫の額位の近い雪山あたりのゲレンデに行けば雪より人の方が多い、結局草スキーに終る位のものそこへ着目した戸畑の人が、鐵道週報へ載せられて以來北九州地方のその道の人が春夏秋冬、ローンスキーを味はつてせめてもの心やり場所としてゐる、小さい乍ら基山驛はさつぱり垢拔けのした氣持ちの良い驛であると云ふのは驛長田口熊太郎氏が人格者で、草スキーに關心を持たれ遠來の未知の誰彼に對しても頗るいんぎんであるからである、場所は、驛から東北一時間半行程、海拔五〇〇位の基山城址のスロープ、車上からもその場所に立つ天智天皇の記念碑がよく見られる。

スキー肩げて、一里半は一寸骨だが滑つても、滑つてもとけない朝鮮芝の上のスキーは又格別の味がある。それに村人の奉仕で驛から小薑迄は坦々とした道があり、山のおちこちに御大典記念の櫻樹が無數に植へられ花の頃は、花吹雪の下を轉ぶ快味は一寸他所では想像もつかぬ愉快さ。それに門鐵局の指定ハイキングコース地で天氣の良い祝祭休日は、それ等の人も混つて大入滿員の有樣頭の良い人は、二人乘スキーを組立てて、ストツクも何も持たず親子仲よく相乘りで滑走する姿等全くほゝ笑ましい風景である。地方新聞でも年に一回ローンスキー大會をやつて氣勢を揚げてゐるので此の頃では、世人に知らるる所となり此處に遊ぶ者は增す一方であるそこで心配なのは大切な此の滑走臺朝鮮芝の生命、樂しむ計りで手入れがされずいつかは臺なしになりはせぬかと云ふ事である。此の頃流行の統制で、期日制か料金制にせねば、長くは樂しめまいとの考へは私一人では無からうと思ふ。當事者識者から、何等かの對策を講ぜられても良いと思ふ。地元には基山ローンスキー倶樂部と云ふのも組織せられてゐる位だからそれ等の人が何とかされるであらう私もさう念じて居る。私は、此のローンスキーに依り少しでも歩き方を體得して、中國から、日本アルプス行の一助にでもと考へてゐるが、十月の會報にも云つた樣に時に惠まれぬ、先日四國の岳友から四國の山への案内狀を貰つて感謝してゐるが、一種獨特の友情を持たるる我等岳友から又、何とか良い助言を得るだろうとの私の淺ましい了簡で私は此のローンスキーの拙稿を終る。（十二月）

八幡製鐵所

「尺岳山の家」
燒失に就て

藤崎生

會報八十九號に尺岳山の家に就て橋本氏が報告されてゐる。その山の家が竣工三ケ月後、工費一萬三千圓が一瞬にして灰燼に歸して仕舞つた。この豪華な山の家はその名の表す如く、勤勞者の保健を目的として建造されたものであるから本格的な山小屋とはその趣を異にし、附近のハイキングや小屋での清遊のといつた、海の家の延長程度のもので、極く一般大衆的なものであるが、この燒失が單なる莫大なる工費の損失等の問題でなく、漸くにして工場勞働者の保健には歩むこと、山に登ること、自然に親しむことが最も理想的であるといふ認識に對する積極的な一歩を踏み出したもので、これは北九州の勞働都市、會社に巨きなエポツクをなし、これに倣つて既に建設してゐる會社もあり、他にも二、三計畫してゐるといふ話も聞いてゐる。處が山の家は危險である、莫大な費用かけて馬鹿げたことだと謂ふ舊套な觀念に歸納されることの損失は實に大きい。當所山岳部に於ても數ケ所に山小屋建設が企圖されてゐたのだが、一頓挫してゐる。

前口上が大變永くなつて恐縮であるが、この山の家建設に當つて理事角田氏を患し、瓜生氏に囑託設計されたもので、尙引續き瓜生氏の請負、監督工事に依り完成したものである。この燒失原因が來屋者の火の不仕末とか番人の不注意に依る出火であるなくば報告の要はないのであるが、建築の不備によるものであるから、今後山小屋建設に就て一示唆となると思ふ。

先づ出火ケ所は煖爐からであるが、この煖爐は自然石をセメント築に張りたる構造のもので、奥壁の厚さは一二〇ミリあつてその外にクレオソート浸しの板壁が鎧張りしてあつた。煖爐の板壁側にはセメントの隙間が相當にあり、石が加熱して板壁に燃え移つたもので引火ケ所は燒白化してゐる。

當時の狀況は、十一月二十六日は氣溫が急下して北九州には珍しくも降雪を見た。風も風速十五米程度のものが吹いており、山頂尾根にある小屋附近は零度を下つてゐたものと思考される。この日來屋者が午前九時頃より午後四時頃まで焚木を燃したのであつて、最後の登山者が下山してから約十分後、小屋番が煖爐横の窓に煙りを見て不審に思ひ外に出て見ると煖爐裏が燒けてゐるので、汲置きの水をかけたのであるが、火勢は烈風に煽られ忽に燒上し全屋を包んで仕舞つた。かくて同五時には上棟は落ち、附近の枯萱に延燒せんとするを見て番人夫婦は急を山麓の田代部落に告げたのは六時半であつた。部落の人達八名が現場に達した時は八時半であつたが、これより先、西側山鹿直方安入寺の警防團員が天に冲する火炎を發見直ちに馳けつけた時は五時三十分で、家屋は既に全燒しており殘炎を消し止めたのであつた。不幸中の幸と謂へば、あの猛火にもかゝはらず周圍は枯萱があり、數間を距てゝ營林省の造植林

（八頁上段へ）

冬のゼム氷河附近 二

ジョン・ハント
望月達夫譯

(四)ネパール・ピーク南西峰(二三、五〇〇呎)の登頂

十一月五日、吾々五人は氷河を登り、最後の廣場に達するや直ちに右手に折れて、前日偵察した急峻な雪のクーロアールを登つて行つた。之は目指すピークの南西稜上、かなり高い地點に達せられるやうに思はれた。疲勞を省く爲クランポンをつけたが、只バサンだけはそれを携行して居なかつた。クーロアールの約三分の二の處には一つのテラスがあり、そこに十一時に達した。このすぐ上でダ・トンダップの荷物がどうしたことか急に解けて、中の物が急斜面を落ちて行つた。その大部分はテラスで止つたが、人夫の寢具だけはずつと下の氷河迄落ちて了つた。だが吾々は少なくも尾根の近くにC Ⅲを作る豫定だつたので前進を續けダ・トンダップは一度一、五〇〇呎を下つて非常な努力の末晩くなつて一緒になつた。

暫くの後吾々は雪庇の直下に在つた。私は幾分スリルを感じつゝもその雪庇を切り碎き、そして突然、今迄に見たこともない、物凄く雄渾な光景に出つくはした時のことを、今猶はつきりと思ひ浮べることが出來る。右手にはネパール・ピークから垂れ下る身の毛も彌立つ樣な、不可思議にも化粧された岩壁、左手にはトウィンス高峰の絶崖、その間に、林立するネパールの高嶺を見下してエヴェレストの山塊がすつきりと聳え立つてゐた。この痩尾根の一ギャップから望まれた崇嚴無比の光景はとても筆に表はすことは不可能であらう。

一方クックは思はざる地點にテント場を見出した。それは明日辿るであらう尾根直下の、雪庇に守られた氷洞であり、風からはうまく避けられてゐた。そして又之以外に平らな場所は見出し得べくもなかつた。このサイトは實に安全で申分なかつた。かくしてC Ⅲは約二一、三〇〇呎の地點に設立され、そして之は東の方シニオルチュに面し、又カンチェンヂュンガの北面は素晴らしく眺められた。

六日、バサン一人をC Ⅲにのこし二本の綱に結び合つて出發した。尾根に出てみると、膚を刺す風の外には何等困難はなかつた。諸々の狀態は實に良く、烈風の爲に雪は硬く締つてゐて、氣持のい、前進が續いた。間もなく吾々は、約六週間も前に此處に來た獨逸隊の足跡を見出して驚かされた。二二、〇〇〇呎の地點で困難は現れ、尾根は非常に痩せて、殆ど垂直な階段の箇所が目前に迫つた。これを南側のテラス狀の場所に避け、深雪を泳いで、急な氷のガリーに這入つた。先頭のクックはクレバスの低い方の端に沿つて、急斜面を左方へトラヴァース氣味に進み、遂にこの惡場の上で再び尾根に達したのであつた。

この二〇〇呎上方では巨大なクレバスの多い地點にぶつかり、その一番高いものゝ直下にC Ⅳを建てることにした。之より上にはも早や風に對して何等シェルターは無く、又低い天幕へ人夫をかへす時間もなくなるからであつた。そこは約二二、四〇〇呎の東面せるテラスで、北東から南東へかけて更に豪宏たる景觀を納めることが出來た。

その夜、二人は高度の影響でか氣分が勝れなかつた。風と酷い寒さの爲に眠むられぬ夜をおくつたけれども、翌朝私はかなり元氣であつた。だがクックは依然調子惡く、食事も餘り進まなかつた。之はなんとしても困つたことであつたが、間もなく私は唯獨り出發することに決心した。クレヴァスの圍の外に出るや風は横殴りに吹き荒んでゐた。尾根筋へ出る爲にクレヴァスの角をまはり、登高を續けることは此の風の狀態——平地に於てすら立ち上つてゐることは不可能に思はれた——ではとても疑問に思はれ、テントに戻る以外には爲すべき術がなかつた。

午後には幾分風が治まつたので、二人はキャムプの上方幾何かを登りかの巨大な雪斜面の基部迄達した。そこは獨逸の連中が引きかへした地點である。クックはそれ以上の登高を思ひとゞまつたので、獨り私は前進し、クランポンの御蔭で速かに登ることが出來た。コンディションも非常に良かつた。午後一時バウワーの地圖に七、一四五米突(二三、五〇〇呎)と記されてゐるピークの直下に達した。そして、この右手へ向つて急峻なフランクを約一五〇呎許りステップを刻んだり、キックステップで登つて尾根に出、烈風の中に屢々休みつゝ遂に午後一時二十分頂稜に達し、更に七、一四五米突の絶嶺に立つことが出來た。烈風の猛威は相變らず物凄く、私は氷斧とクランポンとで辛うじて立ち得た程である。此處から更に高いピーク(七、一六三米峰及び七、一八〇米峰)へ向つて前進せんと再度試みたけれ共綱を結び合つたパーティーにすら危險なこれから先の痩尾根は、とても一人の登攀者には無理であつた。頂稜に隱されてゐる北東面を除いて、四面總て物凄いばかりの豪華なパノラマは、私の心を少しは慰めたが、此の地點から引き下る事は如何にも殘念であつた。なぜなら北方の「ロングリッヂ」やジョンソン群峰、さてはその背後に見える蒿色の西藏高原等は、私にとつて未知の山々、未到の國々であり、强く引き附けられてゐたからである。折しも一羽の鷲が二三、〇〇〇呎の高度を飛翔してゐた。

斯くて私は午後二時十五分キャムプへ戻り、偵察がてらテントの外に足を踏み出した。卽ち翌日北東峰(七、一八〇米)に登らんと心に決めてゐたからである。けれども遂に之は實現出來なかつた。翌朝食事減退の結果クックは元氣なく、加ふるに午前七時には風は依然强く吹きまくつてゐた。私は再び一人で急雪面の處迄行つたが、一人でトラヴァースすることはどうしても不可能であつた。雪雲は吹き寄せられ、カンチェンジュンガはみる〳〵雲と雪片の騷亂の中に掻き消されていつた。二人の人夫がC Ⅲから登つてくるのが見えたので、彼等が到着したら荷造りをして下ることに決めて、十一時五十分キャムプに戻つた。C Ⅲでは親切にもバサンがお茶を作つて待つてゐてくれ、少時の休息後更に下降を續けて一時半ネパールギャップ氷河のC Ⅱに歸着した。三日以降倉庫用として建てつぱなしにしてをいたテントは、風の爲にペシャンコになつてゐた。實に八日の夜の風は此の遠征中での最も强烈なものであつた。諸々の狀態から考へて、高所キャムプを之以上確保することは、この際むしろ無意味なことであつた。そして吾々は最高峰より僅か三五米しか低くない一峰に登り得たことを、喜んでいゝであらう。

(五)トウィンス、シュガーローフ間の尾根を越へて

十一月九日、吾々はトウィンスとシュガーローフとを結ぶ尾根の最低鞍部を越へてトウィンス氷河に下り更にその翌日B・Cに達しようと云ふ計畫をたてた。ダ・トンダップとパサンとは往路通りB・Cに戻ることゝし、クックと私はキクリを伴ひ、一泊分の準備をして日ざす尾根に向つた。近づいてみるとこの尾根からネパールギヤップ氷河への傾斜は、思つたよりも良くて、又尾根の上迄獨逸の連中の足跡が印せられてゐた。クランポンと綱を用ひ、又ネパール・ギヤップからの寒冷な烈風に拍車をかけられて、五〇〇呎の斜面をば速かに登つた。斜面の狀態も非常に良好で、傾斜度も餘り強くはなかつた(四十九度)。尾根の上では南側のシエルターに腰をおろし、眼下の長大な氷河地域を調査した。直下の氷河は始め緩やかに上部ゼム氷河へ下つてゆき、やがて右方へ急激に落ちて、過日トウィンス氷河の末端から偵察した一氷瀑に連らなつてゐるのであらう。吾々は、到達した所から南へ、急な雪のクーロアールを下るごとにした。その最低部に達した時、遂に惡場にぶつかつた。即ちそこから氷河迄は約百呎許り急激に降下してゐて、何れの側も壁は高く、どの岩も非常に脆いやうに思はれた。しかし幸運にも最も容易な進路をとることが出來た。崩壞した壁を幾分下り氣味に右の方へ辿つてゆき、晝頃丁度氷河の上部へ出ることが出來た。だが、幸運は長くは續かず、氷河の狀態は風陰の爲に、ネパール・ピークを登つた時の樣な締つた雪の狀態とは全く逆で、前述の氷瀑の頭迄深い軟雪の中を一時間半も泳がねばならなかつた。尙この氷河をロウアー・トウィンス氷河と呼ぶことにする。次いでセラックスの左のトローフに入り、暫くしてそこから氷壁を三十呎許り下つてトローフの下に出た。がその下ではデブリに磨かれた垂直な岩場に阻まれて、そのトローフから出たが、滑らかな氷の狀態が惡い爲、岩場を左にトラヴアースし、ずうつと尾根を水平に進んでシュガーローフ氷河の方へ行け相に思はれてきた。けれ共程なく脆い岩場に突き當つて了ひ、更に惡いことには谷間の霧が捲きはじめて、ルートの選擇は極度に困難なものとなつて了つた。吾々が達した處は一つの急峻な、岩屑の詰つた狹いガリーの上部で、約三百呎下方にはぼんやりと雪が見えてゐた。かくしてこのガリーを細心の注意をもつて下り、氷瀑の端に達し、更に雪に覆はれた頽岩の上をおりて、午後三時四十五分待望のトウィンス氷河を霧の中に認むることが出來た。直後露營の準備をなし、次いでお茶、肉膏(ペンミカン)、ツァンパ、牛罐の豪遊な夕食をとつた。

翌日B・Cに歸着した時は、ラツチェンから戻つてきた妻と殆ど同時であつた。妻は去る四日、リンヂンとチャカディに附添つて下り、郵便物と新らしい人夫のアン・キタアルを伴つて上つてきた。過般B・Cで經驗された樣な惡天氣の徵候が見え、十日、十一日、十二日の三日間は寒い、風の强い日が續き、しかも一日の大部分は降雪をみた。この間、吾々はキヤムプ近くの岩場に行つて興味あるルートを上下してゐたが、或るクラツクを登つてゐた時、偶然にもその頂に一つのケルンを見つけた。おそらくそれは一九三一年、バウワー隊の誰かの手になつたもので、彼等の注意深い活躍を如實に物語るものであらう。

(六)再びトウィンス氷河へ (一一・一三—一九)

十三日、全員トウィンス氷河の入口なるブルダーキヤムプに登つて行つた。目的は二つに分たれ、クックはダ・トンダップ、キクリを伴つてトウィンス氷河の源頭を偵察し、萬一可能なればノース・コル下の壁を攻擊する計畫を樹て、私と妻はパサンとハワアンを連れて、今一度シュガーローフを試み、更に一旦戻つてゼム・ギヤップに登り、其處から遙かグイチャ・ラを越えてダージリンに歸へるルートを偵察し樣と云ふ計畫を樹てたのであつた。キタアルは暫くクックのパーティーを援助し、それから一旦ラツチェンに下つて六人の人夫を連れて戻り、十一月二十二日に、殘つた荷物や器具をラツチェンへ引き下すことになつた。そして吾々の二隊は二十日迄に一旦B・Cに歸り、更にシムヴ・ラ乃至はゼム・ギヤップを越へて歸路に就く準備をすることにきめた。

(七)再びシュガーローフを目指して

十一月十三日は例によつて降雪を見、翌十四日午前九時、吾々はテントや寢袋を干して出發した。前の足跡は殆ど殘つてゐなかつたが、身體の調子は良く、前進は氣持よく運んでいつた。只不慣れなハワアンは遂にまいつて、私とパサンとが彼の荷を大部背負つてやらねばならなかつたので、最初豫定してゐたよりもかなり下方、約二〇、〇〇〇呎の地點にテントを張らねばならなかつた。年然此處は前回よりも二〇〇呎高い位置ではあつた。テントは風當りの强い處に張られた爲、その夜は餘り安眠出來ず、卷き上げられた雪は强くテントを打つた。そしてシュガーローフの北面に激突する烈風の雄叫びが絕えず聞きとれたのであつた。翌朝の狀態は餘り芳ばしいものではなく、空のみ青々と晴れてはゐたが、膚を刺す風と雪烟の中を、六一七〇米突のコルに向つて猛進した。コルの直下で右手に折れ尾根の最初の岩場への急斜面をキツクステップで登つて行つた。雪の狀態は良かつた。

脆い岩と烈風の爲に綱を結んで前進し、間もなく去る十月二十四日に到達した地點を過ぎて、例の巨大なジャンダルム下の尾根の南面を攀じてゐた。これを南へのトラヴアースと急峻な雪のクーロアールの登攀とによつて處理し、次いで約八十呎許りの困難な岩場を攀じて尾根に達した。この上にはより以上に技術的困難さを示す岩場が連續し、偵察の爲暫く止まらねばならず、二番目の者は寒風の中で辛い確保を强いられ、長いこと岩と接觸してゐたその指は全く感覺を失つて了つた。この爲に後日凍傷はかなり酷いものとなつてゐた。最後の雪稜に近づくや、前進は全く阻まれ、加ふるに烈風は益々猛威を振ふ樣に思はれたので、寒氣に全く感覺を奪はれた吾々は、遂に退却を餘儀なくされたのであつた。ジャンダルムの下では出來るだけ尾根通し下つて幾分でも樂なルートを採つた。例の雪崩がおきた雪稜から氷河のテント迄は、文字通り吹き捲が尾根に達して、最初の岩場に近づかんとした時、大音響と共に巨大なスラブが私と妻との中間、即ちまぢふ方なき稜線上から殺げ落ち二〇〇呎下の氷河迄落下して、その爲に丹念に作つた足跡は跡形もなく洗はれて了つた。このスラブの幅は約四十呎、深さ十五吋にも及ぶ。雪面は登攀中何等切斷されるやうな徵候も示さず、吾々は全く危い處を助かつたのである。

く雪に襲はれ、眼を開けることは全然出來ず、バランスを保つことは極度に難かしいことであつた。勿論吾吾は、もう少し滯在して、更に攻撃を加へんと思つたが、今の季節にこのルートを採ることには幾分無理があり、又それに對する魅力の減つていくのを知つた。根據地に歸へつてから、今迄の偵察や經驗から判斷するに、此の季節の强烈な北西風は一定不變のものであるやうに思はれてきた。そこで一旦下ることに決して、三時過ブルダーキャンプに歸着したのであつた。（續く）

（五頁下段から）

があるのだが、僅に枯萱を舐めた程度で山火事とならず濟んだ、山の家の火災原因が煖爐の加熱に依ることは、設計の不備か、工事上の手落か詳でないが、運搬不便によるためか原案より多少變更されてゐる。それはともかくとして、瓜生氏が工事を完成引渡しを濟したのだから、と言はれるならば問題は別であるが、唯良心的なものがあるばかりである。

小生は燒失當夜及翌日關係者と現場に至り調査したものであつて文責をもつものである。

尙燒失後の煖爐の撮影を致してゐますから、もし御希望でしたならば送附します。

故赤羽良一君を憶ふ

茨木猪之吉

良一は自分の思ふがまゝ實行し、生きぬいて來たのだから、決して悲しい事はないです、世間の人から、おしまれて死ぬ程幸福でもあり滿足な事はないと、十月三十日夜危篤の電報を手に握り急行して病院から自宅へ、小座敷の隅で靜かに彼の母堂から話されたので成程それもさうだと思つた。

私個人としても社會的にも大なる損失は申までもなく、全くまゝならぬ浮世だと、今更ら思つた、彼の明朗な性格三十九年は餘りに急逝だつた、「死んでからガア〳〵さはいでも初まらぬよ、あの皮肉ぽい微苦笑が目前にちらつく、」

周圍の人々や御親戚の方々には誠に痛ましく御愁傷の限りなれど、その死、恰度秋晴れの陽をうけ白菊に圍まれ笑顏は常と變りはない「どうです河岸をかへてビールでも飲みませんか」なんて元氣で言う樣だ。

だが何んと云つても冷々する奥座敷に而も十字架の前に横たはり全く安らかに永眠してゐる、その上には額面のミケランゼルの壁畫の一部アダム、イブの强烈な名畫が光つて、亦歐洲旅行中瑞西の登山中紀念の自作守眞も得意であり、ゴッホの赤い花の繪、あの情熱的色彩を最も好んでゐた事は生前よく耳にした、その君が今は何んと靜寂そのものゝうちに、それは正に死だ。

朝の陽がもれてくる、街中の家根裏より紺碧の澄み渡つた空を眺め、新雪來る、穗高岩峯を憶ひ、その處で發病したのは十月上旬だつた、原因の如何なる事は知るよしもなく、その頃恰度私も乘鞍山麓鈴蘭小屋に滯在して夏以來の悲しみな生活から離れ、久し振りで彩筆を心ゆくまで振つてゐた時だつた。

僅か二ケ月後悲報を再び重ねるなんて、何んと運命の神樣にすなほで早々と飛んで行つたのだらう、私達はたゞ茫然と取り殘されてしまつた、それにつけても玆二三年歐洲から歸朝後の活動はめざましくも輝かしい、いろ〳〵事業や文化的面特に山岳會の爲にも希望を豐富に持つて常にヒラメキ慌しい程活動した、どうあつても寂しいのは私のみではない。

執れ稿を更めて書く事にする、彼の小學生時代の才能の豐かさ其の他思ひ出はつきぬ、今は簡單な赤羽君の訃を報告し哀悼の意を表する次第である。（十二月五日夜）

會員岡本勝二君の戰死

事變以來、登山靴とルツクを銃と劍に代へて支那の大陸に奮鬪されてゐる會員も相當の多數に上つてゐるが、いま會員岡本君の戰死の報に接し感懷に堪へない。次に同じ隊付の鹽原少尉より本會宛送達された懇篤な書面に依つて當時の模樣を忍び、謹んで哀悼の意を表したい。

謹啓

時下秋冷の候貴會益々御隆昌の段賀し奉ります

陣者貴會々員　當隊岡本勝二歩兵中尉殿には本年十月二十日北支那〇〇に於て勇戰敵彈を頭部に受け鬼神を泣かしむ壯烈なる名譽の御戰死を遂げられ、武勳に輝く鮮血を北支の曠野に染められたのであります。

岡本君の御日常は當隊の模範にて吾々の尊敬おくあたわざるものでした同君の如き立派な將校を失ひました事は當隊のみならず、國家の一大損失であります。然し、同君の御英靈は永久に護國の英靈として東洋の平和をお護り下さる事と信じて居ります。

私達も出陣以來滿二ケ年戰友として苦樂を共にし今日岡本君を失ひました事は實に感慨無量でございます、同君は出征中陣中閑なる時は山岳に就て常に御研究なされて居り、其の御熱心さに吾々一同感服をして居りました。

玆に岡本君の名譽の御戰死を謹みてお通知申上げ、同君の御冥福を心よりお祈り申上げる次第です。

（爲御參考、同君の留守宅は東京大森區雪ヶ谷二二七　芦田雪雄樣方です）

十月二十五日

北支多田部隊氣付
釜井部隊小田隊附
陸軍軍醫少尉　鹽原美雄
醫學博士
山岳會御中

編輯者より

暮からの慌しさで、會報の發行も大變遲れて申譯ありません。十二月を休んでこの號を一月號に致します。前號にもお願ひした通り會報原稿の殺到することを編輯者は明け暮れ念じてゐるのですが、幸ひ此頃は投稿が增えて來るやうで、次號は成る可く早く出したいと思つてゐます。正月休暇の御收穫を續々お聞かせ下さるやうお待ちしてゐます。

會員通信

雲取から氷川へ　吉澤一郎

十月二十一日の土曜日、私達は上野熊谷三峯口を經由して近頃運轉を開始したさゝやかなケーブルカーに乘り三峰神社に五時頃著いた。上野から丁度四時間許り、全く便利になつたものである。紅葉にはまだ少し早い樣であつたが流石に秋の空、男體と太郎がくつきりと雲の上に浮んでゐた。

二十二日は午前五時起床、中庭の上の空一杯にオリオンが大きく輝いてゐた。

六時十五分出發、男五名、女六名の大部隊である。稜線の紅葉は既に闌、根張りの大きい和名倉の姿も懐しい。弟と二人で後白岩の密林中に一睡も出來ずに一夜を明かしたのは大正十三年の一月二日だつた。それからもう十五年の歳月が流れてゐる。白岩を越して雲取との鞍部深ダワに著いたのは十時半。友と二人で登山者として最初の日原川下降を行つたのが大正十五年の四月であつた。四月といふのに雪に降り込められた思ひ出の谷である。此の邊の道のよくなつたのには少し許り驚ろかされる。武州雲取小屋に寄つて晝飯。約一時間休憩正午發。此の頃から完全に霧にとり圍まれて氷川へ出るまで殆ど眺望利かず。

雲取の頂上からはえらく大きな防火線が何處までも續いてゐた。鳴澤への分岐點まで一時間、涯て知れぬ尾根道を何處までも東へ辿る。五時五分三ノ木戸への道に這入る。到々懐中電燈のお世話になつて氷川へ著いたのは六時半であつた。

一般に何處の會社でも尤もらしい中年の男は山へ來ない、此の點では女子の方が元氣である。今度の行は可なりの强行軍ではあつたが皆よく頑張つた。

氷川から御岳までのバスは九時頃までである。料金は一人五十錢。ハイヤーは四圓五十錢だ相だが二、三臺とまとめる事は出來ないらしいから注意しなければならない。新宿へ著いたのは九時四十分頃であつた。

十一月の毛勝岳　岩永信雄

拜啓　其後は心ならずも全く御無沙汰勝ちにて失禮致して居ります諸兄益々御健闘の事と拜察致しお慶び申上げます小生今夏も山旅の機を得ずに居りましたが少暇を得ましたので氣候が少し遲れたとは思ひながら五日當地發大山村に至り人夫を頼みましたが中々思ふやうにならず一人を伴ひ七日魚津—片貝谷—を經て阿部谷に野營翌日も快晴にて阿部木谷を遡り紅葉を賞し毛勝岳下にて野營九日午頃新雪、薄氷を踏みて無事頂上着幸雪もなく新雪に美化されたる後立山、劔連峯及その溪谷美を心ゆくまで眺め快哉を叫び十分山氣分を味ひ下山登路を辿りて野營地にて一泊翌日は雨のためゆつくりすることもならず十一日朝元氣にて歸京致しました

匆々不一

六ツ石から鷹ノ巣へ　石塚秀次郎

十二月四日晴　立川で朝六時四十七分の御岳行電車に乘換へ七時四十分御岳驛着、氷川行のバスに乘る。月曜日のせいか客は古里小學校の教員と私の二人限りだ、八時三十分氷川着火の見の横から登る、五月に來た時は絹笠から降りたので今度は三ノ木戸へ向ふ。小中澤入東京市林道を拔け尾根へ出ると絹笠からの徑と合す十時二十分六ツ石三角點に着く、眼前に御前、大岳山が靜かに横たはつてゐる。十時五十分ほがらかな茅戸の尾根を鷹ノ巣へ向ふ二つばかり立木のある隆起を過ぎると一、五三三米の所へ着く。晴てはゐるが風が冷たい。急傾斜の切開きを登ると鷹ノ巣山二等二角點へ出る〇時五分過ぎだ。晝食を取り乍ら展望を恣しいまゝにする。大菩薩の右手はるかに白雪の南アルプス連峯がハツキリと見える。七ツ石雲取は近く、眼前に三頭山の大きな根張りその右手高く富士山がクツキリ白く浮き出して居る。〇時四十分降りは水根澤谷の上を六ツ石の南側に出で境へ出たのが四時十分。誰一人會は靜かな一日の山歩きでした。

會務報告

十一月定例理事會並ニ役員總會

十一月十四日(火)午後六時半
虎ノ門本會事務所
出席　高頭、冠、武田、槇、茨木
三田、額田、藤島、加藤、塚本
吉澤、鳥田、西堀、木村、中司
委任　木暮外十三名

役員總會

一、社團法人設立準備報告の件
定款案、設立趣意書可決、右案を以つて主務官廳の内意を伺ふこと
加藤理事に一任
發起人に木暮、小島、田部、冠、槇諸氏を推舉することに決議す
一、本年度總會の件
十二月十四日(木)　於商工倶樂部
定例理事會
一、山岳第三十五年編輯報告
主たる原稿豫定左の通り
豪灣に各山　神商大、蒙古旅行
京大、小興安嶺　京大、加奈陀の山　東良三、カラコラム山名　吉澤一郎
一、會報編輯報告
一、登山團體懇談會の件
一、新入會員承認
名古屋帝大山岳部、川崎幸太郎、坂野猶人、神田豐次郎の諸氏

第九十三回小集會(關西)

昭和十四年十月二十四日　於清交社
一、カナダ山岳の近況
會員　東　良三氏

玆五六年毎年訪米されてゐる東氏は本年も二度北米及カナダへ旅され最近歸朝されたばかりなのでカナダ山岳の狀況につき詳しいお話を伺ふ事が出來た。山の海と稱されるギヤルボージ山塊の登攀について種々ヒマラヤと對照の上興味と刺戟を强く與へられた。即ち人口稀薄にして完全な地圖をも持たないブリテイシュコロンビアには一萬呎以上の山が一六一峰も有り彼のウインバーをしてスイスを五十併せたのと同じだと嘆ぜしめた程で何れも氷河圏内にあり美しい溪谷を有し登山興趣に於ては滿點、旅行者は感嘆以外の言葉を知らない。幾十哩歩いても人にあはぬ山旅、ロンリーな氣分を滿喫しつつ針鼠のはねる上を辿みゴーツの群が氷河の上を渡つて行く崇高な姿を視つむる時人の世の狹小なわずらひを顧み自然の大いさの前に心からいれふさずに居れない。或ひはスリーピングバツグに身を横たへ星を仰ぐ野營の折に氷河の空間を埋める遠雷をきく時のたまらない氣持。淋しいと

いはうか人の世でないといふのか怖しくはないが何ともいへない寂漠の感に打たれる。アンネームアンナンバーの之等山群に諸君の名をつけよと呼びかけてゐる程山の多いこの地方により深い關心を注いでも決して失望される事はあるまい。と推稱。簡易化された登山方法の紹介から我國の登山裝備についても一言され引續きドナルドモンバー夫妻發見のワディングトンや夕姿美しいロブソン、マシニノイネの登山史、ガリバルヂパークの良さなど多くの鮮麗なスライドを見せて頂き乍らお話を伺ふ事が出來參會者一同時間の不足を惜しみつゝ閉會した（富田記）

會員章再交附

一七九一番　岡山市　岩井　隆次

受贈會報部報雜誌

東京アルカウ會（アルカウ）
登山とスキー社（登山とスキー）
登歩溪流會（會　報）
奬健歩行會（歩　行）
大阪ミテコー會（O・M・S）
朋文堂（山小屋）
東京旅行クラブ（會　報）
山岳小説、氷河を越えて
野阿千伊譯　藤島敏男氏
The Geographical Journal 9
Trail and Timberline 9
Die Alpen 9
Le Alpi 8—9
The Mountaineer 9
Horolezec VI
De Berggids 10
Appalachia 10
An English Pronouncing Dictionary
Daniel Jones　田邊　主計氏
厚生省體力局（武道場及體育館）
日本厚生協會（厚生の日本）
偃松山岳會（會　報）
東京嶺山岳會（會　報）
名古屋山岳會（會　報）
臺灣山岳會（臺灣山岳彙報）
東京市山岳部（部　報）
白樺旅行會（白　樺）
山小屋倶樂部（部　報）
東京山彦山岳會（山　彦）
東鐵やまをとこの會（會　報）
中京山岳會（ベルグロイテ）
京郷山岳會（京郷山岳）
東京地學協會（地學雜誌）
東京山聲會（三角點）
M・Rグループ（爐　端）
山溪會（山と溪）
東京築地山岳會（椎　石）
高知高校山岳部（南　岳）
東京やまびこ會（やまびこ）
飛彈山岳會（山　力）
Die Alpen 10
S. T. F. 10
The Geographical Journal 10

寄贈圖書

山と丘陵　中村謙著　同　氏

昭和十五年一月二十日印刷
昭和十五年一月廿五日發行
東京市豐島區池袋四ノ四五八
發行兼編輯者　石原巖
東京市芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所　日本山岳會
電話芝（四三）一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者　植田庄助
印刷所　成文堂印刷所

日本山岳會會長
木暮理太郎著
山の憶ひ出
待望遂に成る！
日本山岳界の至寶、われらの大先達、木暮先生の山旅四十年間の大記錄。
薦むる人々（一）
石黒忠篤　田部重治
茨木猪之吉　小島烏水
徳富蘇峰　黒田孝雄
尾崎喜八　黒田正夫
冠松次郎　松方三郎
上巻　定價三・五〇　送料・二二
下巻　定價三・八〇　送料・二二
ジャヴエル著　尾崎喜八譯
一登山家の思ひ出
定價三・〇〇　送料・二二
龍口生閣
東京市芝區新橋際・振替口座東京五〇六五